

教育相談グループ

共同研究者	平成 15～17 年度	吉川 一義 (金沢大学教育学部教授)
	平成 16～19 年度	小林 宏明 (金沢大学教育学部准教授)
	平成 18～19 年度	榭蔵 千恵子 (金沢大学院生)

1. グループの概要

平成 15 年度、本校では早期教育相談事業として幼児発達相談室を立ち上げた。特別支援教育の拠点として、また附属学校として特色のある教育相談システムの構築を目指して取り組み始めた。本グループでは、本校の教育相談のあり方について、ハード面として相談システムについて、ソフト面として幼児発達相談室の中心的な取り組みである幼児教室の在り方および特別支援教育コーディネーターの在り方について検討してきた。

2. これまでの研究について

(1) 教育相談システムの構築 (平成15年度～平成17年度)

本校では、平成 15 年度に「幼児発達相談室」を立ち上げ、今後の取り組みを充実させていくために、他校の相談事業の内容や成功例を文献から学びながら、知的障害養護学校での早期教育相談事業のあり方を考察することから研究がスタートした。平成 16 年度、平成 17 年度には、全国的に相談事業として様々な役割・機能を担う学校が増加している状況の中で、附属学校として本校ならではの特色ある教育相談システム作りを目指し研究に取り組んだ。その結果、相談・支援部として校務分掌上に位置づけられ、金沢大学との連携を活かした特色ある相談体制が整備された。

(2) 幼児教室の取り組み (平成 16 年度～平成 19 年度)

本校幼児発達相談室では、平成 16 年度より幼児教室を開設し、コミュニケーションに困難を示す幼児に対してインリアル・アプローチを用いて、実際のコミュニケーション場面から子どものコミュニケーション能力の評価と支援を行い、毎年度事例を積み重ね考察してきた。また、幼児教室を機に本校に入学したある児童について具体的なコミュニケーション支援を通して、支援の連続性について考察した。

(3) 特別支援教育コーディネーターの取り組み (平成 17 年度～平成 19 年度)

大学の附属特別支援学校である本校における特別支援教育コーディネーターの取り組みについて、毎年度の実践をまとめ考察しながら、附属特別支援学校における特別支援教育コーディネーターの実践の方向を探ってきた。

3. 研究の成果

(1) 平成 19 年度の教育相談システム

本校相談・支援部は、幼児から成人を対象に幼児発達相談、学齢期教育相談、就労生活相談の三部門に分け、各々に幼児発達支援コーディネーター、教育支援コーディネーター、就労・福祉コーディネーターの 3 名が配置されている。うち教育支援コーディネーターが、相談業務を取りまとめている。また、特別支援教育、心理、法律を専門としている大学教員がアドバイザーとし

て加わっている。さらに、幼児発達相談の中心的な取り組みとなっている幼児教室は、大学との連携のもと、インリアル・アプローチを用いてコミュニケーション支援を行っており、本校の特色となっている。

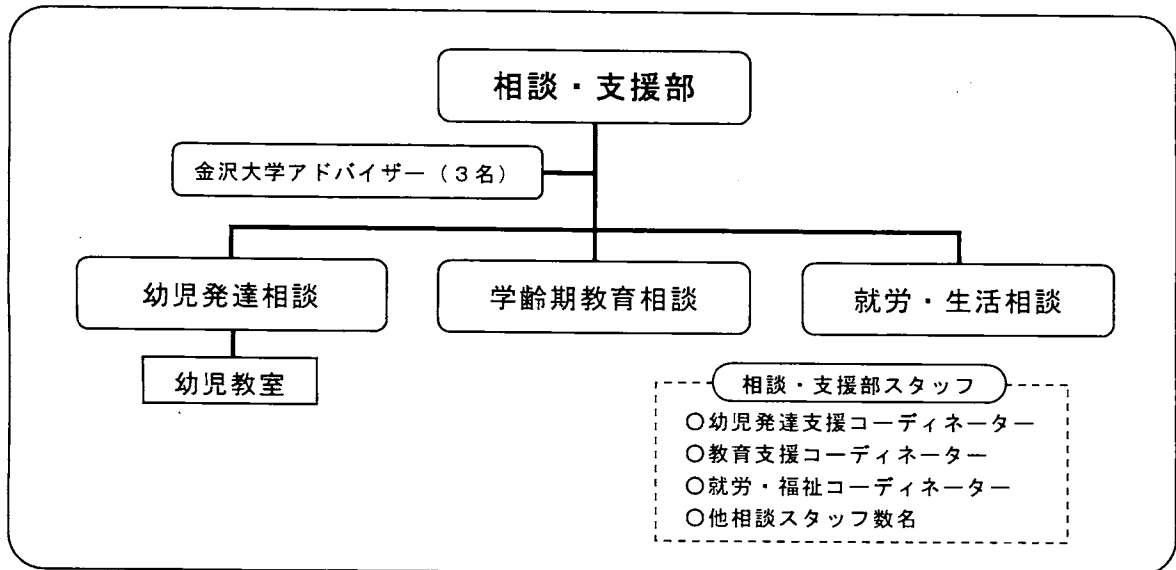


図1 相談・支援部組織図

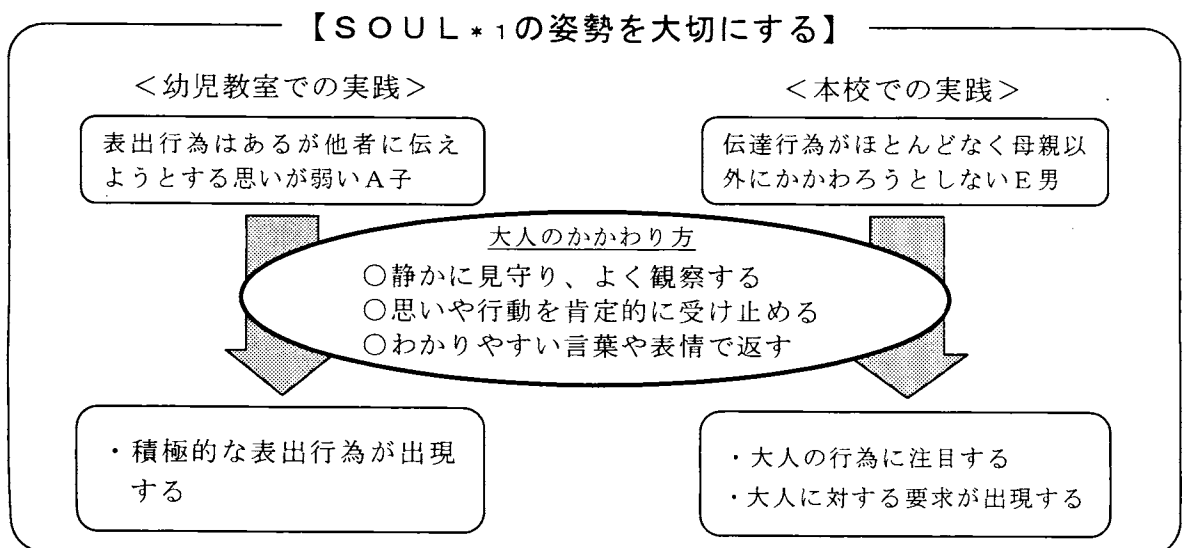
(2) 幼児教室での取り組みより

幼児教室では、本校小学部の教師が中心となって研究実践を行ってきた。

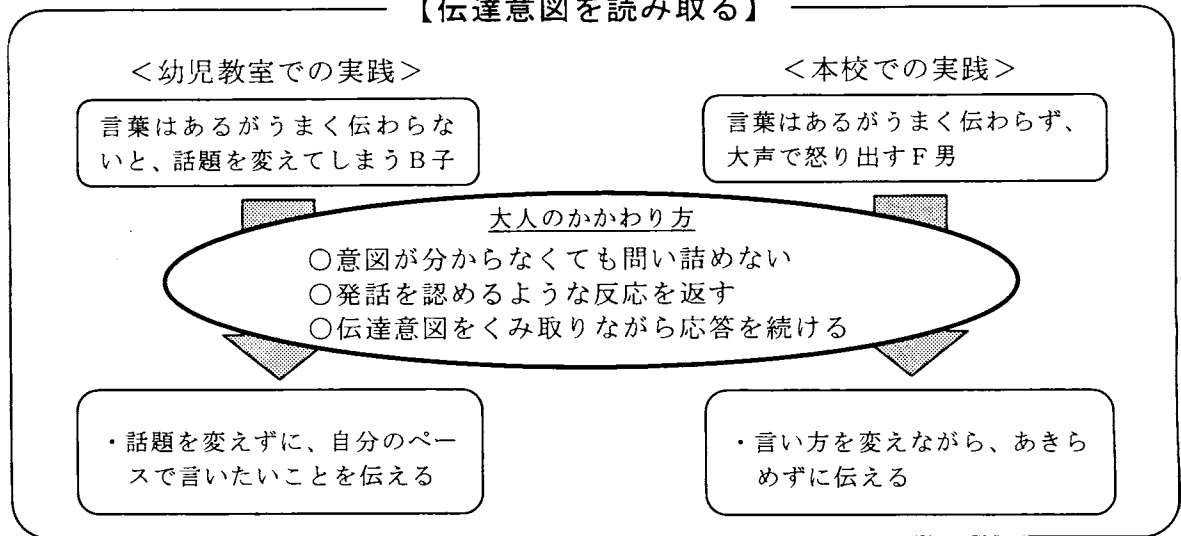
その結果、①教師のコミュニケーション支援の変化、②支援の連続性、③保護者への支援、以上の3点で成果が得られた。

①教師のコミュニケーション支援の変化

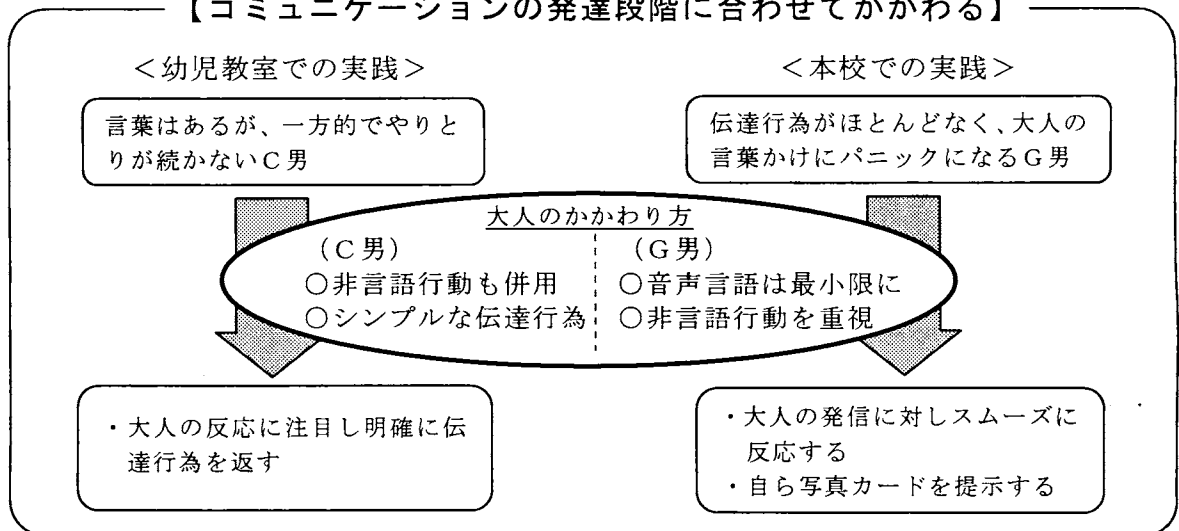
幼児教室でインリアルビデオ分析を受けた教師は、自分自身の子どもへのかかわり方についての分析・評価を行うことを通して、今までの大人主導のかかわり方ではなく、子どもを尊重したかかわり方の大切さを学んだ。そして、幼児教室で学んだことが本校の日々の実践にも還元されてきた。以下に具体例を示す。



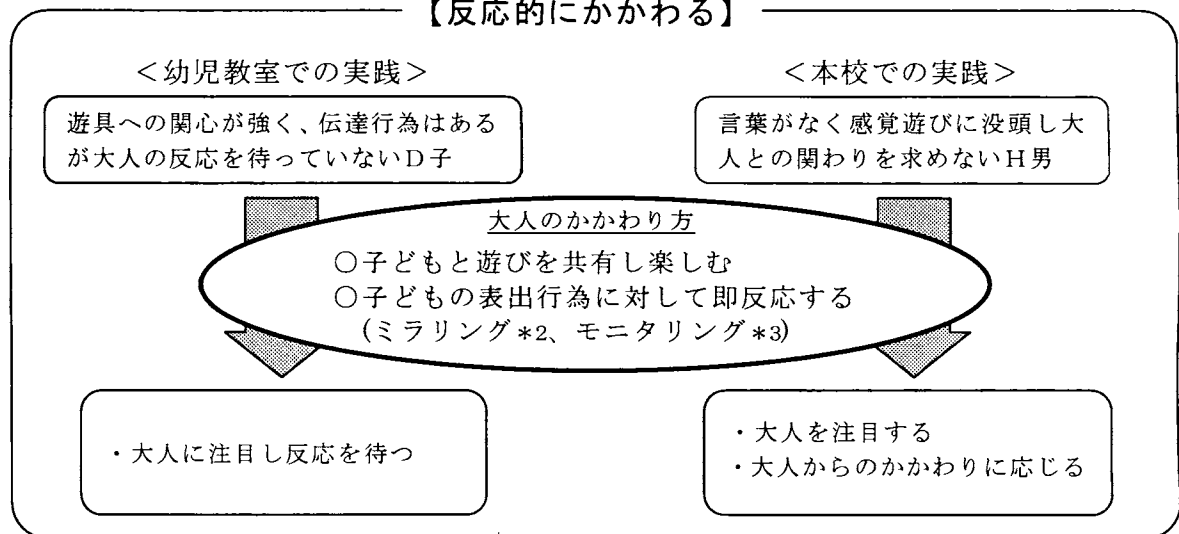
【伝達意図を読み取る】



【コミュニケーションの発達段階に合わせてかかわる】



【反応的にかかわる】



②支援の連続性

平成 16 年度に幼児教室に参加したM児は、はじめはほとんど表出行為がなかったが、M児とかかわる大人がインリアル・アプローチのかかわりの基本姿勢である「SOUL」を大切にすることで、表出行為が見られるようになった。それが、M児にとって有効であるということが幼児教室のビデオ分析から明らかになり、本校小学部に入学後もかかわる教師が「SOUL」の姿勢を大切に支援を継続して行っている。

また、幼児教室では、保護者へビデオ分析の結果を報告するだけでなく、保護者とともにM児への支援について考える機会をもった。本校入学後も担任と保護者が幼児教室で共有した支援をつながりながらM児の支援を行ってきている。さらに、本校で行ったM児にかかわる支援者（担任、学童保育指導員、ガイドヘルパー、言語聴覚士）によるケース会議においても「SOUL」がM児に対する支援の基礎となることを確認することができた。

幼児教室では、スタッフが参加幼児の在籍する幼稚園や保育園を訪問する機会をもっている。このことは、本校入学の対象となるような子どもたちが就学前にどのような環境で過ごしてくるのかわかる機会となり、本校小学部の新入生を迎えるにあたり、幼小一貫指導の観点より新入生の教育環境を考えることができる点で大きな意義がある。

③保護者への支援

幼児教室では、スタッフが幼児とかかわっている時間と平行して、保護者同士が話す場を設けた。また、共同研究者である、小林准教授が保護者同士の話す場と一緒に加わったり、個人面談を行ったりした。幼児教室に参加した保護者のアンケート結果は概ね以下のようなようだった。

- ・専門の先生に的確なアドバイスをもらい、大変勉強になった
- ・保護者同士のつながりができて良かった
- ・家庭でのかかわり方を見直すよい機会となった
- ・普段抱えている悩みや疑問点を共有したり共感したりできた

(3) 特別支援教育コーディネーターの取り組み

3年間の相談件数について以下の表 1 に示す。相談件数は増加傾向にあり、このことは、平成 18 年度よりコーディネーターの内の 1 名が、内外からの相談に十分な時間を割くことができる体制が作られたことが大きな要因であると考えられる。

表 1 3年間の相談件数

年 度	相 談 件 数		
	校内から	校外から(電話含む)	総件数
平成 17 年	45 (39)	88 (73)	133 (112)
平成 18 年	112 (73)	109 (63)	221 (136)
平成 19 年 (10 月末現在)	63	90	153

() 内は、10 月末での相談件数

- | | |
|---------------------------------|----------------------------|
| * 1 S : Silence (静かに見守ること) | O : Observation (よく観察すること) |
| U : Understanding (深く理解すること) | L : Listening (心から耳を傾けること) |
| * 2 ミラリング : 子どもの行動をそのまま真似る | |
| * 3 モニタリング : 子どもの音声やことばをそのまま真似る | |